

中等
教科

明治文典

卷之二

815.

H117(2)

(3)

明治三十八年二月二十四日
文部省檢定濟

文學博士賀一著

中等教科
明治文典
卷之二

合資會社
26.9.10
東京富山書局藏版

244920

卷の二教授上の注意

一、第一篇に於て品詞箇々の分別を教へたるを以て、本篇に於ては各品詞相互の關係を學ばしむるを主眼とし、體言及び用言と助詞との連結、用言と助動詞との連結を教へ、最後に體言と動詞との關係を説きて、動詞の自他、主語、客語、補語の性質に及び、第三篇の文章論に接續せしむ。

二、用言と助動詞との連結は之を活用連語と稱し、助動詞を時法、式相の四種に分ち、尙指定、比較の助動詞をも加へてその連結を表示せり。活用連語の表は一見甚だ複雑なるが如くなれども、一を以て他を推すべきが故に、實際上生徒の之に習熟せんこと極めて容易なりと信ず。總合

したる形に於て活用連語を學ばしむること、本書の目的とする所なれば、教授者諸君はよくこの意を諒とし、常に活用連語の全體を口語と對照して教授せられんことを望む。

三、助動詞中に於て今文に用ゐざるらん、めり、ましてん、なん等の如きものはすべて之を中古文法に譲り、四年級以上に教授すること、なせるは編纂の趣旨にいへるが如し

四、助動詞との連結、中古文法に違背せるものにして通用頗る廣く、今文の文法としては承認して可なるもの尠からず。然れども中古文法を典型とすること、尙一般の情況なるを以て、これ等は皆「未だ承認せられず」と附記し、練習題をも掲げたり。教授者の意見によりては、之を認許し

て誤謬に非ずとなすも亦可ならん。

五、本書に於ける客語の意義は少しく從來のとは異なる所あり。從來の文法書は一に西洋文典に據り、他動詞の目的語のみを客語と稱したり。本書に於ては國語の性質に鑑みて、他動詞の第二客語、受身、使役の場合にあらはるゝ動作者、動作命令者の如き皆之を客語と定めたり。故に客語にはに。或はよりの助詞を伴ふものあり。この相違に注意あらんことを望む。

中等教科 明治文典 卷之二 目次

第二篇 品詞相互の關係

第一章 體言と助詞との連結	一
練習一	九
第二章 動詞活用の名稱及意義	九
練習二	三
練習三、四	四
第三章 形容詞(附形容動詞)活用の名稱	一五
第四章 助動詞活用の名稱	一七
第五章 動詞と時の助動詞との連結	一九
練習五	二五

第六章	動詞と法の助動詞との連結	二六
練習六	三〇
第七章	動詞と否定の助動詞との連結	三一
練習七	三三
第八章	動詞と受身使役の助動詞との連結	三四
練習八、九	三七
練習十	三八
第九章	形容動詞と助動詞との連結	三八
練習十一	四〇
第十章	時、法、相の意義の轉換	四〇
練習十二	四二
第十一章	指定及比較の助動詞の連結	四三

第十二章	助動詞連結の順序	四六
練習十三、十四	四九
第十三章	用言及活用連語と助動詞との連結	五〇
練習十五	五六
第十四章	用言の慣用語句	五七
練習十六	六〇
第十五章	體言と用言との關係—主語、述語	六一
客語	六一
練習十七、十八、十九	六五
第十六章	主語の轉換	六六
練習二〇、二一	七一
練習二二	七二

體言には語尾の活用なきこと、第一篇に學べるが如し。右の例の(い)によりて、一つの體言が色々の場合に應じて種々の異りたる助詞に連ることを知るべく、又(ろ)によりて、これ等の助詞は體言の活用にあらず、同一の關係を示すには如何なる體言も同一の助詞に連ることを知るべし。

〔三〕 (1)の 樹の枝 三つの柿 汝の母

(2)が 我が家 三が一 君が代 君が歸るを

送れば

(3)を 書を讀む 文を作る 五つを與ふ

(4)に 先生に問ふ 汝に與へん 二つに割る

六時に起く

(5)へ 東京へ行く 諸方へ通知す 前へ進む

(6)より 六時より、始まる 獨逸より歸る 山より

り高し

(7)まで 九時まで勉強す 神戸まで行く

(8)と 酒と煙草とは衛生に害あり 三と二と合す

れば五となる。

助詞には體言と體言との間の關係を示すものあり、體言と用言との關係を示すものあり。

以上の助詞は最も普通に用ゐらるゝものにて、大方は日常の口語にも用ゐらるゝものなり。

これらの助詞につきて注意すべきこと左の如し。

〔三〕 太郎球を投ぐ(文語) 太郎が球を投げる(口語)

人枝を折る(文語) 人が枝を折る(口語)

口語にてかく用ゐる「が」は文語にて全く省くべきものとす。但し

人が汝を愛するの。を知らない

君が歸るの。を送れば

といふ如く、口語にて下にのを添へたる語句の上にかゝるときは、文語にても、

人の。汝を愛するを知らず

君が。歸るを送れば

の如く「の」或は「が」を附加ふるなり。

君が歸りし日。

の如く下に體言ある時も同様なり。

〔四〕 東京に在り 東京へ行く

日西に没す 船西へ行く

には時間にもせよ、場所にもせよ、或定まりたる一點を示すに用ゐる、へは方向を示すに用ゐる。この區別は、口語にては混同して用ゐらるゝこと多し。

〔五〕 漢書と史記の列傳とを讀む

漢書と史記との列傳を讀む

とは事物を並べて指定する助詞なれば、その並ぶる體言の下に一つつつ添ふるものとす。右の例を見て、その異同を知るべし。口語にては下のとを省くこと多し。

〔六〕 (1) 花は。櫻木人は。武士

(2) 舜も。人なり。我も。人なり

(3) これぞ。日本一の名馬

(4) 生還するもの三人のみ。
 (5) 祝ふ今日こそ。楽しけれ
 (6) 鳥すら恩を知る
 (7) 雨降り風さへ吹く

右の中も、はの二つは口語にも普通に用ゐれば明瞭なるべし。ぞこそのみともによくの中にて殊に一つの事物に重み置き、ていふときに用ゐる助詞なり。すらは物を比較して軽きものを擧ぐるとき用ゐる。さへはあるが上に物の添はる意をいふとき用ゐる。口語のさへは文語のすらを用ゐるべきときに用ゐらるゝこと多し。

この種類の助詞は、文の中より省きても、文の意味に格別の變化を起さず。

〔七〕 雲か山か。吳か越か。
 人やさき我やさき
 蝶よ花よと育つ

さても降つたる雪かな。
 かやは疑問よは呼びかけ、感動かなは感動に用ゐる。かやは亦感動に用ゐることあり。

〔八〕 これをば見よ
 我には許せ
 山よりも高し
 何處までも見ん
 これぞと思ふ
 われこそは無官の大夫敦盛

右の如くいくつもの助詞の重り合ひて用ゐらるゝこと多し。かゝる場合には、それ〴〵の助詞の意味を重ねたるものなり。

〔九〕 口語にて綴る

一錢とでもなし

人にして人に非ず

人として鳥に如かざるべけんや

義經をして平氏を討たしむ

右の如く、て及びしては直接に體言につゝかず、既にに、と又はをに連りたる體言につゝく。にてにしては口語の「で」「であつて」の義なり。

練習一、左の助詞を用ゐて短文を作れ

よりは をも よりも までも すらも

のみは へも には にも

第二章 動詞活用の名稱及意義

〔一〇〕 動詞には語尾の變化即活用あることを學べり。これより、その活用の名稱と意義とを學ばん。

奈行變格活用の動詞は六つの活用形を有するものなれば、之にて説明するを便利とす。

第一活用形の「死な」は「死なば」と用ゐられて、未だ成立たぬことを假にいふ形なれば未然形といふ。

第二活用形の「死に」は「死に損ふ」「死に難し」の如く、直に他

の動詞又は形容詞即用言に連る形なれば連用形といふ。
 第三活用形の「死ぬ」は「人死ぬ」の如く言止むる形なれば終止形といふ。
 第四活用形の「死ぬる」は「死ぬる人」「死ぬる時」の如く、體言の上につく形なれば連體形といふ。
 第五活用形の「死ぬれ」は「死ぬれども」「死ぬれば」の如く、或條件の已に成立せるを許していふ時に用ゐる形なれば已然形といふ。
 第六活用形の「死ぬ」は命令をいふときに用ゐる形なれば命令形といふ。
 奈行變格には以上六つの活用形あり。同一の方法を以てこの六種の形に他の活用の動詞をあて、考へ見よ。

〔二〕 四段活用の動詞には四つの活用形あるのみなれば、書かば書き難し、書く、書く人、書けども、書けとなりて終止と連體とは同形、已然と命令とは同形なるを知る。

未然	連用	終止	已然
かか	かき	かく	かけ

〔三〕 良行變格活用の動詞も、同じく四種の活用形を有す。但し連用と終止と同形を有することのみ、四段活用に異なり。

未然	連用	連體	已然
あら	あり	ある	あれ

〔三〕 上二段活用下二段活用の動詞には四種の活用形ありて、第一活用に於て、未然、連用、命令の三つを兼ね。但し命

令には「よ」といふ助詞を付くべし。

未然 連用 命令	終止	連體	已然
----------------	----	----	----

おき	おく	おくる	おくれ
すて	すつ	すつる	すつれ

〔四〕 上一段活用、下一段活用の動詞は三種の活用形あるのみなれば、第一活用にて三役を兼ねる外、第二の活用形にて終止連體の二役を兼ねたり。命令に「よ」を添ふること前に同じ。

未然 連用 命令	終止 連體	已然
み	みる	みれ

け	ける	けれ
---	----	----

〔五〕 左行變格、加行變格活用の動詞は、五つの活用形を有するを以て、第一の未然形にて命令を兼ねるのみなり。但し命令に「よ」を添ふること前に同じ。

未然 命令	連用	終止	連體	已然
感ぜ	感じ	感ず	感ずる	感ずれ
こ	き	く	くる	くれ

(注意) (一) 口語動詞の活用には終止と連體との區別全くなし。
(二) 連用形は名詞となる形なるを知るべし。

練習二、左の活用形の名稱を問ふ。

食は	信じ	願ふ	見え
----	----	----	----

立ち	起くる	得る	耻ぢ
棄つ	焼くる	流す	書け
及第す	卒業せ		

練習三、左の動詞の六種の活用形を記せ。

持つ	禁ず	堪ふ	著る
悔ゆ	止む		

練習四、左の文に誤あらば正せ。

- (イ) 私慾を制することは難く、放逸に流ることは易し。
- (ロ) 今や秋高く、馬肥ゆ時なり。
- (ハ) 妻戀ふ鹿の鳴く音あはれなり。

- (ニ) 人才智なきときは業を執り身を立つと能はず
- (ホ) 疾病流行して、死すもの多し。

第三章 形容詞(附形容動詞)活用の名稱

(二六) 前課に於て學びたる六種の活用に形容詞をあて、考へ見よ。

善くば	未然
善くあり	連用
善し	終止
善き人	連體
善けれども	已然

故に形容詞の四つの活用形に於ては、未然形にて連用を兼

ぬることを知る、形容詞には命令形の活用なし。

未然	終止	連體	已然
連用	よし	よき	よけれ
よく			

(注意) 口語の形容詞活用には終止連體の區別なし。

(二七) 形容動詞はいづれも良行變格と同じく活用するを以て、其役目の分擔も全く良行變格の活用に同じ。これには命令形もあり。

未然	連用	連體	已然
よから	よかり	よかる	よかれ
詳なら	詳なり	詳なる	詳なれ
整然たら	整然たり	整然たる	整然たれ

第四章 助動詞活用の名稱

(二八) 第一篇に於て助動詞の活用には動詞に等しきもの、形容詞に似たるもの等あることを學べり、故に助動詞も亦それらの動詞、形容詞と同じく各段の名稱を有す。

(一)	未然	終止	連體	已然
(I)	れ	る	る	るれ
(2)	られ	らる	らるる	らるれ
(3)	せ	す	する	すれ
(4)	させ	さす	さする	さすれ
(5)	しめ	しむ	しむる	しむれ

下二段活用に
等しきもの

(二)	未然	連用	終止	連體	已然
(1)	なら	なり	なる	なれ	命然
(2)	たら	たり	たる	たれ	良行變格活用 に等しきもの
(3)	ら	り	る	れ	
(4)	へから	へかり	へかる	へかれ	
(注意) □は現今用ゐぬ印なり。第一篇にいへる如し。					
(三)	未用	終止	連體	已然	
(1)	可く	可し	可き	可けれ	形容詞の活用
(2)	如く	如し	如き		に似たるもの
(一九)	終止	連體	已然		
ん	ん	ん	め		
き	し	し	か		

ず ぬ ね
 (注意) 英語の直譯にてしの連體形を終止形の如く用ゐる風あり誤らぬ様注意すべし。

第五章 動詞と時の助動詞との連結 (動詞の時)

〔一〇〕「書か」は未然、「書き」は連用、「書く」は終止、連體、「書け」は已然、命令なること前課に之を學べり。左の如く助動詞と連りたる例を見よ。

(1) 書か
 (2) 書きたり
 (3) 書くべし

(1)は受身の意味をあらはして、未然の意なし、(2)は「たり」の助動詞につゞきて用言には連らず、(3)は「べし」の助動詞につゞきて終止せず。これ等の例にて、未然連用以下の名目は活用の一つの功用につゞきて名づけられたるものたるを知るべし。動詞の種々の活用形は、一方に於ては他の助動詞に連るべき役目あり。

助動詞は獨立しては其意味をなし難く、動詞は助動詞の助なければ種々の作用をいひあらはし難し。故にこの各種の活用形より、種々の助動詞に連りて、各種の連結を形造るなり。以下次第に之を説かん。

(三) 雨やむ 鳶とぶ

「やむ」「とぶ」の如き單純なる動詞にては、現在に起る動

作をいひあらはすことを得れども、過去に起りし動作、又は未來に起るべき動作をいひあらはすこと能はず。故に時の助動詞を附加へて、動作の時間の關係を明瞭にす

- (イ) 雨やみたり。
- (イ) 雨やめり。
- (ロ) 雨やみき。
- (ハ) 雨やまん。
- (ニ) 雨やみたりき。
- (ホ) 雨やみたらん。

(イ)は動作の今正に終れることを示す。故に現在完了の時といふ。(ロ)は動作の過去に終りしことを示す。之を過去の時といふ。(ハ)は動作の未來に起るべきことを示す。之

を未來の時といふ。(二)は完了の時と過去の時と重なりたるもの。(ホ)は完了の時と未來の時と重なりたるもの。即(ニ)は過去のある時に於て、(ホ)は未來のある時に於て、動作の已に完了せることを示す。故に過去完了、未來完了の時といふ。是に於て動詞の時には左の六種の區別あることを知る。

(1) 書く

現在

(注意) 現在は過去未來等に對していふ時をいふ必要なき場合には、時の助動詞を採らざれば亦この形なり。以下皆之に倣ふ。

(2) 書きたり

書けり

現在完了

(3) 書きたり

書きたり

過去

(4) 書きたり

書きたり

過去完了

- (5) 書かん 未來
- (6) 書きたらん 未來完了

(注意)

(一)「たり」「き」「たりき」「たらん」の四つは動詞の連用形より連り「ん」は未然形より連る。但し加行變格活用は來は來きとは續かず。

(二)「り」は書けり、死ねり、感ぜりの如く四段活用、奈行變格活用、左行變格活用の動詞に限りて、え列の音を有する活用形より連るものとす。近頃は良行變格よりも續けて「居れり」、「異なれり」など使用すれども、未だ一般に承認せられず。(三)「堪へり」、「受けり」など下二段よりりにかゝるは誤なり。

(四) 左行變格活用の動詞はきの連體(し)已然(しか)に連るに未然形よりす。

及第せし。

及第せしか。

(五) 左行四段活用の動詞よりし、しかに連るに、「押せし」「殘せし」など已然形より連る様に書くは、左行變格又は左行下二段活用の動詞の接續と混同せるものなり。目下廣く行はるれども、未だ一般に承認せられず。

(六) 「やみぬ」の如く用ゐるぬも亦完了の時を示せども、現代の文には終止形の外用ること少なし。

練習五、 左の文に連結の誤あらば正し、動詞の時を辨別せよ。

- (イ) (ロ) (ハ) (ニ) (ホ) (ヘ) (ト) (チ) (リ)
- 勉強しし甲斐ありて首尾よく及第せり。
 - 一旦名聲を落せしが後之を回復せり。
 - 人情風俗は時代と國土とによりて異なれり。
 - 本校所定の學科を修めて正に其業を卒へり。
 - 我が海軍にては現今四箇所に軍港を設けり。
 - 頼時は流矢に中りて死ししかども貞任の勢尙盛なりき。
 - 尊王の論盛にして幕府遂に倒れり。
 - 一日も光陰を徒費しし事なし。
 - 一大驚歎の聲は全國に響き渡れり。彼の成功を祝する聲は又之に伴へぬ。

第六章 動詞と法の助動詞との連結 (動詞の法)

(三) 前課に於て動詞の時を示す方法を學べり。然るにこれにては動作をありのまゝに述べて、たゞ動作の起る時間を明瞭にしたるのみ。故に「書くだらう」の意にて推量をあらはし、「書く筈だ」の意にて義務をあらはす如き、種々の意をあらはすには、法の助動詞との連結を形造らざるべからず。

- | | | | |
|-----|------|----------|------|
| (イ) | 書くべし | 書くだらう | 推量の法 |
| (ロ) | 書くべし | 書く筈だ | 義務の法 |
| (ハ) | 書くべし | 書くことが出来る | 能力の法 |

(二) 書くべし 書け 命令の法
べしを附加へて右の如き種々の意味を示すことを得。

(注意) 命令法は「書け」といふ命令形にてもいひあらはし得れども「書くべし」とべしを附加へてもいひあらはし得るなり。

(イ) 推量の法 (四つの時)

(一) 「明日は雨降るべし」「明日は雨降るなるべし」といへば「雨が降るだらう」といふ推量をあらはす。推量の法にはべし又はなるべしを添ふるなり。之を時にあて、考へよ。

- | | | | |
|----|---------|------|-----------|
| 現在 | 書くべし | 現在完了 | 書きたるなるべし |
| | 書くなるべし | | 書けるなるべし |
| 過去 | 書きしなるべし | 過去完了 | 書きたりしなるべし |

推量には右の如く四つの時あり。未來の時なし。未來の事を推量する場合にも、推量する所爲は現在の動作なれば

未來の時なきなり。

- (注意) (一) 良行變格の動詞及良行變格と同様に活用するものは連體形よりべしに連り、其他は一般に終止形より連る。
 (二) なるべしに連るは連體形よりす。

(ロ) 義務の法 (三つの時)

〔三〕 「丁年に達すれば兵役に服すべし」といへば「服す筈だ」
 「服さねばならぬ」といふ義務の意味をあらはす。この
 場合には三つの時あり。

現在	書くべし。	書く筈だ
過去	書くべかりき。	書く筈であつた
未來	書くべからん(べけん)	書く筈だらう

右の如く三つの時ありて、完了の時なし。

(ハ) 能力の法 (三つの時)

〔三〕 「六尺の屏風も躍らば越ゆべし」は「越えることが出来る」といふ能力の意を示す。これにも義務と同じく三つの時あり。

現在	書くべし。	書くことが出来る
過去	書くべかりき。	書くことが出来た
未來	書くべからん(べけん)	書くことが出来よう

- (注意) (一) べからんは約まりてべけんとも用ゐらる。
 (二) これは助動詞にて能力をいふ場合なれども、現今の文にては「書き得」「書くことを得」の如く得といふ動詞を以て能力を示すと多し。(第十四章参照)

(ニ) 命令の法 (二つの時)

(三三) 「規則を守るべし」といへば「規則を守れ」といふ命令の意に用ゐたるものなり。この場合にはたゞ一つの時あり。
 現在 書くべし。
 命ぜられたる動作は未來に起ることなれども、命令の動作は現在なり。過去又は未來の命令なし。

練習六 左の文に連結の誤あらば正せ。

- (一) 一覽しし人は東の入口より退場するべし。
 今日學ばざれば他日必ず悔ゆべし。
 (ハ) (ロ) われ等の利用する天然物の中にて最も要用なるものは何なるかと問はゞ何人もまづ指を石炭に屈すなるべし。

第七章 動詞と否定の助動詞との連結

(動詞の式)

(三七) これ迄學べるはいづれも動詞の肯定をいふ場合なり。動作を打消すにはず又はざりの助動詞を用ゐるなり。この關係を示せば

書く―肯定の式
 書かず―否定の式

となる。之を時にあて、考へ見よ。

現在	書かず。	書かない
過去	書かざりき。	書かなかつた
未來	書かざらん。	書かなからう

(注意) 現今の文語には完了の時なし。
三六 更に之を法にあて、考へよ。

(イ) 推量の法

現在	書かざるべし。	書かないだらう
過去	書かざりしなるべし。	書かなかつただらう

(ロ) 義務 (ハ) 能力の法

現在	書くべからず。	書いてはならぬ
過去	書くべからざりき。	書いてはなかつた
未来	書くべからざらん。	書いてはいけなからう

(ニ) 命令の法

現在	書くべからず。	書くな
----	---------	-----

三五 義務を示すものに限り一層其意を強くするため、二重

の打消を取ることもあり。二重の打消なれば意味は肯定になるなり。

現在	書かざるべからず。	書かなくてはならぬ
過去	書かざるべからざりき。	書かなくてはなかつた
未来	書かざるべからざらん。	書かなくてはならぬ

三〇 助動詞のまじは推量の法と否定の式とを兼ねたるものにして、口語のまいに當る。終止形に連ることべしに同じ。二三の注意(一)を見よ。

練習七、左の文に連結の誤あらば正せ。

(イ) 品物に手を觸るるべからず
 (ロ) 此處塵芥を捨てべからず

- (ハ) 猥に出入するべからず
- (ニ) これは學生としてするまじき所業なり

第八章 動詞と受身使役の助動詞との連結(動詞の相)

〔三〕 これまで學び來れる動詞の連結は、時のあらはし方、法のあらはし方、否定のあらはし方にて、動作をなすかたにつきての種々の用法なり。然るに「人に打たる」「路に棄てらる」の如く、らるの助動詞を添ふれば、動作を受くる受身の意をあらはし、「打たす」「棄てさす」「歸らしむ」の如く、さす、しむを加ふれば、人に動作をなさしむる使役の意味をあらはし、「打たせらる」「棄てさせらる」「歸らしめ

らる」の如く「せらる」「させらる」「しめらる」を加ふれば人に動作せしめらるゝ使役の受身を示す。之を動詞の相といふ。この關係を示せば、

(イ)	受身の相	書かる	書かれる
(ロ)	使役の相	書かす	書かせる
(ハ)	使役の受身の相	書かせらる	書かせられる

〔三〕 受身使役使役の受身の助動詞と結付きたる動詞は普通の動詞と同じく、種々の時法を有し、又打消の助動詞に連ること第一表の如し。

(注意) (一) 受身す使役せらる使役の受身は四段活用、奈行變格、良行變格即ち否定になるとき、あ列の音を有する動詞に連り、らる受身さす使役させらる使役の受身は其他の動詞に連るしむし

めらるはすべての動詞に連るなり。

- (二) 佐行變格よりらる。さすに連るとき感動せらる。感動せさすの如くいふは當然なり。然るを感動さる。感動さすの如くいふこと今多く用ゐらる。然れども未だ一般に承認せられず。
- (三) 下二段活用動詞の得よりしむに連るとき得しむといふは常然なり。然るに得せしむと書く人多し。これ未だ一般に承認せられず。

〔三〕 使役相、受身相、使役受身相の動詞も亦時法及び式の助詞に連ることを得。別表第一に就いて之を見るべし。

(注意) 否定の式能力の法より更に使役となるものあり、その活用は第二表について知るべし。

練習八、左の文に連結の誤あらば正せ。

- (イ) 舊規則は今年限り廢止さる。新規則は明年より行はるべし。諸藩に勅して之を議さしむ。
 - (ハ) 一郎に畫を畫かせ、二郎に書を讀ませす。
 - (ニ) 敵の大隊は我軍に包圍されて全滅したり。
 - (ホ) 資金を給して其好むところを研究させたり。
 - (ト) 希望者には出席することを得せしむべし。
- 普國はかつてなほれおん一世の大打撃を被り、國內おほかた佛軍の馬蹄に蹂躪されたり。

練習九、左の動詞につきて時と法との助動詞を連結せよ

- 崩す
- 流る
- 見る

落つ 勉強す
練習十、第一表により左の動詞のあらゆる連結を示せ。
取る 有り 變ず

第九章 形容動詞と助動詞との連結

〔四〕ら・行變格と同じき活用を有する形容動詞は亦助動詞に連結することを得。其連語は左の如し。

(肯定) (否定)

現在	詳なり	詳ならず。
過去	詳なりき。	詳ならざりき。
未來	詳ならん。	詳ならざらん。

法を加ふれば。

(イ) 推量の法

現在	詳なるべし。	詳ならざるべし。
過去	詳なりしなるべし。	詳ならざりしなるべし。

(ロ) 義務 (ハ) 能力の法

現在	詳なるべし。	詳なるべからず。
過去	詳なるべかりき。	詳なるべからざりき。
未來	詳なるべからん(べけん)	詳なるべからざらん。

〔五〕又使役の相を有することを得。

現在	詳ならしむ。	詳ならしめず。
現在完了	詳ならしめたり。	
過去	詳ならしめき。	詳ならしめざりき。
過去完了	詳ならしめたりき。	

未來 詳ならしめん。詳なるべからざらん。
未來完了 詳ならしめたらん。

〔三〕 使役の相も亦種々の法を有することを得。繁を避け
てこゝに擧げざれば第二表に就いて之を知るべし。

〔六〕 月明にして星稀なり。
舉止閑雅にして容姿美麗なり。

形容動詞は文の半途にあるときは右の如くしての助詞に
連るものなり。

練習十一、なかりの形容動詞のあらゆる連結を示せ。

第十章 時法相の意義の轉換

〔五〕 未來 書かん……………書かう

未來完了 書きたらん……………書いたらう

使役相の未來 書かしめん……………書かせよう

能力法の未來 書くべからん……………書ける筈だらう

右の例にて未來の時を示すすべての連結は、亦推量の法を
示すにも用ゐらるゝことを知るべし。口語にても同様な

ること前例に照して明なり。

これ時の助動詞法の助動詞に轉じたるなり。

〔四〕 推量の法 書くべし 書くだらう

推量の否定 書かざるべし 書かないだらう

右の口語に照しても明瞭なる如く、推量法は亦未來の時と
して用ゐらるゝことを知るべし。これ法の助動詞の時の
助動詞に轉じたるものなり。

〔四〕 受身の相

書かる

書かれる

使役の受身の相 書かせらる

書かせられる

右の口語に照しても明瞭なる如く受身又は使役の受身は敬語として用ゐらるゝことを知るべし。又敬語は動詞の給ふを助動詞に用ゐて使役相の下につけ

書かせ給ふ

といふこともあり。古文にては敬語相のみにては敬語となるなり。

これ相の助動詞の敬語の助動詞に轉じたるものなり。練習十二、左の連結の意味を口語にて述べよ。

- (イ) 佐藤先生は去年獨逸國より歸朝せられたり

- (ロ) 新聞雜誌も備へありて居ながら歐米各國の近状も知らるゝなり

- (ハ) 書籍室は船の前方に在り。凡そ二十冊を敷くべし。

- (ニ) 毎日千字づつ書き出すべしと命せられたり。

- (ホ) 今の境遇にて正式の學校に入學せんことおもひもよらず。蟻の舉動を観察せよ。彼等の身長よりは幾十倍もあらんかと思ふ昆蟲をも運搬し行くなり。

- (ト) 來十日午前八時御出門陸軍士官學校へ行幸仰出ださる。

第十一章 指定及比較の助動詞の連結

〔三〕

知りしなるべし

知りたりしなるべし

右の如く、推量の法にはなり。の助動詞の用ゐらるゝことをいへり。元來この助動詞は勢を強め、或は指定する意味を有する助動詞にて、各種の連語は、皆最後に「なり」の形を有することを得るなり。左の例を見よ。

書く……………書くなり。
 書きたり……………書きたるなり。
 美しかりき……………美しかりしなり。
 書かす……………書かするなり。
 書かせず……………書かせざるなり。
 書かるべし……………書かるべきなり。
 書かせられざるべし 書かせられざるべきなり。

右の如くすべて連體形に接續するものにして、この助動詞

は亦普通の形容詞の連體形にも連る。

〔四〕 正成は忠臣なり。

三つと二つとの和は五つなり。

舜も人なり。我も人なり。

我は我なり。彼は彼なり。

右の如く「なり」は體言の下にもつゞくことを知るべし。

〔五〕 父父たらざれども子子たり。

これは何たることぞ

右の如く「たり」も亦體言につゞく。

なり、たりの二つを指定の助動詞といふ。

〔六〕 天女を見るが如し。

花の如し

右の如く體言よりはの、用言よりはがに連り、然る後比較の助動詞「如し」に續く。但し用言の場合にはがを省くこともあり。「如し」は連用形よりなりにつづく。

第十二章 助動詞連結の順序

〔要〕 第五章以下動詞形容動詞と種々の助動詞との連結を學べり。かくの如く一つの動詞及び形容動詞は、それ／＼の意味を有する助動詞に結付きて、時の差別をも表はし、或は推量或は可能或は義務命令等の法をあらはし、又は打消の意を示し、又は受身、使役、使役の受身等の作用を示すのみならず、これ等の助動詞はまたいくつも互に重り合ふを以て、第一表、第二表の如き多くのいひまはし方を得

るなり。これにて助動詞の效用の甚だ大なるを知るべし。而してこれ等の助動詞の重り合ふには自ら一定の順序あるものにて、其上下の順序は左の如し。

- (一)使役 (二)受身 (三)敬語 (四)打消 (五)完了の時 (六)普通の時 (七)指定 (八)法
 - 書かせ……られ………す、
 - 書き………給ひ………たり………き。
 - 書く………なる………べし。
 - 書か………れ………給は………ざり………き。
 - 書かせ………給は………ざり………し………なる………べし。
- 〔要〕 驚くべき程。發達したりしなり
感ぜしむる能はざりき。
書かざるに。あらず

右の如く體言、用言、助詞に逢ふときはこの連結の順序又前に戻り行くことを知るべし。

〔罨〕 故に「ざり」、「べかり」の如きありを含みたる助動詞と逢ふときはこの連結の順序を案すことあり。そは別表の連結を見て知るべし。

〔罨〕 動詞又は形容動詞の下にいくつもの助動詞の重り合ひたるときは、之を一つの動詞若くは形容動詞と見做すべく、單純なる動詞と同じく、未然、連用以下の形をとるものなり。そは連結の最終にある助動詞の活用によるものとす。左の例を見よ。

書か・し・め・ば	書か・し・め	書か・し・む	書か・し・む	書か・し・む	書か・し・む	書か・し・む	書か・し・む
未・然	連・用	終・止	連・體	已・然	命・令		

書か・せ・た・ら・ば	書か・せ・た・り	書か・せ・た・り	書か・せ・た・る	書か・せ・た・れ・ど・も	書か・せ・た・れ
書か・れ・ざ・ら・ば	書か・れ・ず	書か・れ・ず	書か・れ・ざ・る	書か・れ・ざ・れ・ど・も	書か・れ・ざ・れ

(注意) 「論せずんば」、「聞くべくんば」の如く未然の場合、んを挿むことあり、これは單に口調の爲めなり。

用言と助動詞との連結せるものを活用連語といふ。

練習十三、左の活用連語の未然形、連體形、已然形を示せ。

論ぜざるべし。 堪ふべからず。

出發し給ふ。 盛大なりしなり。

感ぜしむ。

練習十四、左の文に誤謬あらば指摘せよ。

- (イ) 大納言にして右大將を兼ねしめり。
- (ロ) 馬尼刺市は一萬の西班牙兵に防禦されありといふ。
- (ハ) 彼等が一致協力の方は甚だ強固なれば之によりてわれ等には想像し得べからざる大事業をも成し遂ぐなり。
- (ニ) 一たび郷國を出づれば何人も堪へ難き望郷の念にうたる。
- (ホ) 往年米國に博覽會の舉ありし時、エスキモー土人の部落を置き數多の土人を伴へ來りてそこに住ましたることありし。
- (ニ) ジェムス、ワットの蒸氣機關を發明ししは西曆一千七百六十九年の事なりし。されど之を應用したるは鐵道の發明さるゝまてには、なほ數十年の歲月と數多の人の苦心とを要したるなり。

第十三章 用言及び活用連語と助詞

との連結

(五)

の	花を見るの記	何ぞ思はざるの甚しき
が	信ずべきが如し	甚しかりしが如し
を	知らざるを知らずとせよ	論ぜざるを得ず
に	忍耐の久しきに驚く	
へ	餘り疎遠なるへは通知せず	
より	日の出づるより	
まで	日の没するまで	
と	愛すると愛せざると	小なると大なると
は	今の世に生れたるは大なる幸なり	
も	行くも歸るも分れては	

ぞ 何故なるぞ。
 こそ 言はざるこそよけれ
 のみ 馬前まざるのみ
 か 行くか歸るか。 旅順は今日中に陥落すべきか
 や 余の始めて學校に入學するや。
 よ 面白き事を見たるよ。 この繪のうつくしきよ
 かな いふべきかな

右の如く、體言の下につきたる助詞はすべて動詞、形容詞ま
 たは活用連語の連體形の下に添ふことを得。かゝる場合
 には、その動詞、形容詞又は活用連語を一つの體言と見做せ
 ば明瞭なるべし。
 次に二三の連體形よりつゞかぬものを擧げん。

(五) 論ずる人ありといふ
 行くべしと論ず
 見たる人なしといふ

(五) に擧げたる「と」は物を並べて比較するものにて、そ
 の時のみは連體形に連れども、その他は右の例の如く終
 止形につゞくものとす。

(五)

(イ) ありやなしや
 (ロ) 汝は日本國民に非ずや
 (ハ) 打てよ、こらせよ

(五) に擧げたる「や」「よ」は感動の「や」「よ」なり。疑問に用
 るる「や」は終止形よりつゞき、命令に用ゐる「よ」は命令形
 よりつゞくこと、この例を見て知るべし。

(注意) (一) 疑問のや。は亦反語の意をなすこと(口)の例にて知るべし。

(二) いづ、幾許、何處の如き疑問の詞上にある時は下にかの助詞を用ゐる。やを用ゐること未だ承認せられず。

〔五〕

終日待ちたるが何の音便もなかりき
日はまだ暮れざるにはや暗くなれり
今日降るべしとは思はざりしを

右の「が」「に」「を」は〔五〕に擧げたるものと異り、用言若くは活用連語にのみ、續くものにて體言には續かず、前の事と後の事と相背く場合に用ゐる。連體形よりつゞくことは、前の「が」「に」「を」に同じ。

〔五〕

花咲かば告げん 無くば幸なり
樂あれば苦あり 遠ければ行かず
悔ゆれども及ばず 廉なれど品悪し
如何なる事ありとも 如何に美麗なりとも
花咲きて散る 上書して諫む

右の「ば」と「ども」とも「ても」亦體言には附屬せざる助詞にて用言、活用連語のみに附屬す。ばは場合によりて、未然形、已然形より、どもは已然形より、ともは終止形より、形容詞は連用形より、ては連用形よりつゞく。
ばは前後相應することに用ゐる、ども、ともはがに、をの如く相背くときに用ゐる。ては前と後とを接續するものなり。
(注意) 「諸處を詮索するも見當らず」の如く、どもを用ゐる

るべき所にも。を用ゐるは尙一般に承認せられず。

練習十五、左の用言、活用連語に接續の誤あらば正せ。

- (イ) 數日の旅行に過ぎざりしかども得るところは少からざりしと信ず。
- (ロ) 八百と十五との差は幾何なるや。
- (ハ) 少年の時學ばざれば老年に至りて悔ゆるとも及ぶべからず。
- (ニ) 關門閉ぢざるも通行する人稀なり。
- (ホ) 歲月は流る如し。
- (ヘ) 人と禽獸との區別は言語を有すと有せざるとに在りと論ずる人あり。
- (ト) 出席せるや否やを検して後問題を與ふべし。

- (チ) 蟻が冬期中の食料を貯ふるといふことは全く世人の誤解に屬せり。
- (リ) 戦路に添へる電信線は悉く切斷せられて北京天津間の交通は通州を通過する一條の電線を存すのみ。

第十四章 用言の慣用語句

(一五) 用言、活用連語は助詞、體言又は他の用言に連りて更に
 又他の用言、活用連語に連るとあり。(一六) 參照かくして或
 は能力或は命令或は願望等、其他種々のいひまはし方一
 層自在になるなり。今其中にて最も普通^ニに用ゐられて、
 已に一箇の活用連語の如くなれるものを、知るといふ動
 詞につきて、左に擧げん。

〔五〕

知るに足る。
 知るを得。
 知るといふへし。
 知らんとす。
 知らんと欲す。
 知るべければなり。
 知らしむるにあり。
 知らしむるを要す。
 知りたりといふ。
 知らざるに非ず。
 知るべくもあらず。
 知らざるのみならず。

右はいづれも種々の助詞に連りて、更に下の用言活用連語に移れり。

〔五〕

知らざる所なり。
 知らしむること勿れ。
 知ること能はず。
 知るべきこと多し。
 知らしめざることならん。
 知らしむべからざる所以なり。

〔六〕

右は體言に連りて、更に下の用言活用連語に移れり。
 知る能はず。
 右は用言に連りて、他の活用連語に移れり。
 〔五〕 未來の意味より、推量の法の意味に轉じたる連語を、更

に反語の意味に用ゐること多し。それには上に適當なる副詞、代名詞等を添へ、下には感歎の助詞や、を添ふるゝ多し。

誰か之を知らん
豈に知らざらんや
安ぞ知らんや
豈に知らざるべけんや

右の如きは日常の文章に最も普通に用ゐらるゝものなれば、よくその意義と用法とを知り置くべし。

練習十六、左の活用連語を口語にいひ換へよ

- (イ) 國民の義務を果さざるべからず
- (ロ) 蓋し測らざるべからざるものあらん

- (ハ) 豈に寒心せざるべけんや
- (ニ) 何ぞ認めざるの甚しきや
- (ホ) 悪ますんばあらざるなり
- (ヘ) 最も恐るべきものにあらすや
- (ト) 志望を成し遂ぐるに能はざりき
- (チ) 亦以て其尋常ならざるを知るべし
- (リ) 見るものとして教訓ならざるはなし

第十五章 體言と用言との關係—主語—

述語—客語

(キ) 山崩る 柿落つ

右の文にて山、柿は崩るゝもの、落つるものにして、崩る、落つ

の動作は山、柿のなす所なり。地震にて崩るゝか、地雷火にて崩るゝか明瞭ならざれども「崩る」といふ動詞のあらはす意味は單純に山の崩れたる現象を示すのみ。柿の落つるも、風にて落ちたるか、猿に落されたるか、原因不明なれども「落つ」といふ動詞にて落つといふ現象を示せり。かくの如く動詞の示す動作が、動作者のみにて成立する動詞を名けて自動詞といふ。

この場合に、動作者として用ゐられたる體言を、その動詞に對して主語といひ、その動詞を主語に對して述語といふ。

(三) 猿(柿を)落す

地震(山を)崩す

右の文にて「落す」「崩す」といへば、「猿落す」「地震崩す」と

のみいふときは、何を落すか、何を崩すか明瞭ならず。「柿を」「山を」といひて意味始めて完し。かくの如く主語、述語の外に他の何をといふ語を要する動詞を名けて、他動詞といふ。この場合に「何を」にてあらはされたる體言を客語といふ。「落す」「崩す」の如き動作は、動作者(主語)の外に其動作の及ぶ目的物(客語)なければ動作の成立することなし。

(三) 旅人 路を 問ふ

父 褒美を 與ふ

右の二文にて旅人、父は主語なり。與ふ、問ふは述語、路、褒美は客語なり。然れども「問ふ」「與ふ」の動作は、問はるゝ人、與へらるゝ人なければ成立すべからず。かくの如き動作は、

動作者(主語)と動作の目的物(客語)との外に動作を仕向けらるゝ人ありて、動作始めて成立するなり。

旅人 里人に 路を 問ふ
父 子に 褒美を 與ふ

「里人」「子」を加へて動作の關係始めて明瞭なり。故に問ふ・與ふの如き動詞は第一客語の外尙第二の客語を要するものなり。

他動詞には二つの客語を要するものあり。

〔三〕自動詞他動詞には同一語原より出でて其活用を異にするものあり。例へば、

家焼く(下二段) 餅を焼く(四段) 雨やむ(四段) 運動を止む(下二段)

〔四〕同一の動詞にして或時は他動に用ゐられ、或時は自動に用ゐらるゝものあり。例へば

花開く(四段) 戸を開く(四段)

練習十七、左の動詞の自他を辨ぜよ。

沈む 分く 分つ 戦ふ 整ふ 知る 散る
流る 流す 宿る 宿す 焼く 退く 攻撃す
主張す 立つ 敗北す 出發す 評す

練習十八、左の自動詞に對する他動詞を擧げよ。

見ゆ 亡ぶ 起く 聞ゆ 倒る 終る 始る

練習十九、左の他動詞中、第二客語を要するものを指摘せ

よ。

教ふ 問ふ 願ふ 與ふ 思ふ 見る 食ふ 加ふ

第十六章 主語の轉換

〔五〕 母死ぬ

太郎 蟬を捕ふ

父子に財産を譲る

右の例にて死ぬは自動詞にして捕ふ譲るは他動詞なり。
この場合に於て主語たる母、太郎、父はいづれも動作者なり、
〔五〕 子 母に 死なる

右の如く自動詞より受身の形を作るときは、子、即ち動作を蒙るもの 死なるに對して主語となり、これまでの主語即

動作者は「に」の助詞を採りて第二客語の如き形をなす。
自動詞より受身の作らるゝ場合には、動作を蒙るもの、新に加はり來りて主語となり、これまでの主語、客語となる。

〔注意〕 英語にては自動詞より他動詞の生ずることなし。

〔六〕 蟬、太郎に捕へらる

かくの如く他動詞より受身を作るときは、これまでの客語たる蟬は「捕へらる」の主語となり、これまでの主語、即ち動作者は「に」の助詞を採りて第二客語の如き形をなす。

他動詞より受身の作らるゝ場合には、客語、主語、相轉換す。

〔六〕 子 父より 財産を 譲らる

財産 父より 子に 譲らる

二つの客語を要する他動詞より受身を作るときは、かくの

如き二様の受身を生ず。一はこれまでの客語主語となり、一はこれまでの第二客語主語となる。一つの客語の主語に變じたるときは他の客語は本のみなり。

〔六〕 (1) 敵軍退く

(2) 下女餅を焼く

(1)は自動詞にして(2)は他動詞なり。この場合に於て敵軍下女は動作者にして退く、焼くに對する主語なり。

〔七〕 之を使役の形に改めて

敵軍に退かしむ

下女に餅を焼かしむ

とするときは、敵軍を退く様に仕向けたるもの、餅を焼かし

めたるもの、主語たらざるべからず。例へば

我が軍の攻撃は 敵軍に退かしむ

主婦は 下女に餅を焼かしむ

の如くならざるべからず。かくなれば、これまでの動作者即主語は客語となる。而して

敵軍に退かしむ 下女に餅を焼かしむ

敵軍をして退かしむ 下女をして餅を焼かしむ

の如く、二様にいひ得べきを以て、これまでの主語は「に」又は「を」「して」をとりて第一客語若くは第二客語の形をなすといふべし。故に

自動詞又は他動詞より、使役の動詞を作るときは、動作の命令者新に入り來りて主語となり、これ迄の主語は客語とな

る。

〔七〕

我軍 敵に退かしむ

主婦 下女に餅を焼かしむ

右の使役より更に受身を作りて

敵軍 我軍に 退かしめらる

下女 主婦に 餅を焼かしめらる

とすれば使役せらるゝもの主語となるが故に、退く、焼く、の動作者再び主語となり、命令者は客語となり、「に」の助詞をとりて第二客語の形をなす。

〔五〕

敵壘 我軍の爲めに 略取せらる

我軍 大隊をして 敵兵を討たしむ

主婦 下女に命じて 餅を焼かしむ

客語は文章上の句調、其他の關係により、單純に「に」又は「を」をとりてあらはるゝこと少く、右の如き別種の形をなすこと多しと知るべし。

練習二〇、左の文を受身の形に改めよ。

(イ) 公曉實朝を殺したり。

(ロ) 猫鼠を捕へんとす。

(ハ) 慈善家乞食を救はず。

練習二一、左の文を使役の形に改めよ。

(イ) 牧童牛を曳く

(ロ) 兒童文を作らず。

(ハ) 舟沈めり。

練習二二一、左の文を使役の受身に改めよ。

(イ) 笠置艦太沽に派遣せらる。

(ロ) 敵兵退却す。

(ハ) 我軍敵を撃退す

第十七章 補語

(五)

(イ) 造營成る。

(ロ) 偉人は大業を成す。

雀蛤となる。
湯水になる。
氷を水になす

天皇憲法を定む。

華盛頓を大統領と定む。

(イ)の成るは自動詞にして主語のみにて動作の成立することと上段の例に照し見て明なり。然れども下段の例を見れば雀なる湯なるにては何になるか明瞭ならず。蛤と水にといひて始めて明瞭なり。(ロ)の成す定むは他動詞にして主語と客語とにて動作の成立するものなれども下段の例にては氷を華盛頓をのみにては何となしたるか何に定めたるか明白ならず。水に大統領とといひて始めて明瞭になるなり。

かくの如く用ゐられたる語を補語といふ。故に自動詞にも他動詞にも補語を取るものありと知るべし。

(注意) (一)補語はと或はにの助詞を伴ふ。

(二) 客語も亦にの助詞を伴ふことあれども、紛るべからず。客語は前課に説けるが如く、主語の轉換によりて主語となり得れども、補語は決して主語となること能はず。

(四) 余は六時に起きたり

今日東京に着す

右の如く時間或は場所をいふものは亦同じく、の助詞を伴へり。これは副詞の功用をなすものにて補語にあらず。又もとより客語にもあらず。

(五) 秋草爛熳と咲く

櫻花は奇麗に咲きたり

右の奇麗に、爛熳とは形容動詞にして補語にあらず。又も

とより客語にもあらず。

(六) 趣味自然に生ず

光秀蹶然として立つ

右の自然に、蹶然とは副詞にして補語にあらず。又もとより客語にもあらず。

練習二三、左の文より客語補語を指摘せよ。

(イ) 中江藤樹先生は俗稱を與右衛門といへり。

荷物を東京より京都まで輸送す。

舟或は右に傾き或は左に傾く。

(ニ) 二月十一日を紀元節と定む。

(ホ) 信用を得んと欲せば時間を堅く守らざるべからず。

中等教科
明治文典
卷之二終

受身ノ相				使役ノ相				受身ノ相				使役ノ相			
命令 ノ法	義務 ノ義務 (消ノ打重)	力及能 ノ義務	法ノ量推	法ノ常通	命令 ノ法	義務 ノ義務 (消ノ打重)	力及能 ノ義務	法ノ量推	法ノ常通	命令 ノ法	義務 ノ義務 (消ノ打重)	力及能 ノ義務	法ノ量推	法ノ常通	
現在	未過現	未過現	過去	現在	現在	未過現	未過現	過去	現在	現在	未過現	未過現	過去	現在	
書カシメラルベシ	書カシメラルベシ	書カシメラルベシ	書カシメラルベシ	書カシメラルベシ	書カシムベシ	書カシメラルベシ	書カシムベシ	書カシメラルベシ	書カシメラルベシ	書カルベシ	書カシメラルベシ	書カシムベシ	書カシメラルベシ	書カシメラルベシ	
現在	未過現	未過現	過去	現在	現在	未過現	未過現	過去	現在	現在	未過現	未過現	過去	現在	
書カシメラルベシ	書カシメラルベシ	書カシメラルベシ	書カシメラルベシ	書カシメラルベシ	書カシムベシ	書カシメラルベシ	書カシムベシ	書カシメラルベシ	書カシメラルベシ	書カルベシ	書カシメラルベシ	書カシムベシ	書カシメラルベシ	書カシメラルベシ	

(1) 完了の時の助動詞にはタリの連結のみを挙げたり。この外にヌあり。又四段、左行變格、奈行變格はりに連ることを得(二一節注意二、六參照)

(2) 使役の助動詞としてはシム。の連結を挙げたり。此外にス、ナスあり(第三二、三三節注意一參照)

(3) マジの連結は略せり

(4) ナリはナリを含まぬすべての連結の下につく。

(5) この表には本來の意義のみを主として擧げたり。意義の轉換に就ては第十章を參照せよ

活用連語表第二

(一) 否定式ヨリ使役相ニナルル動詞ノ活用連語(三箇注意参照)

相ノ役使				相ノ常通				相	相ノ身受				相ノ常通				相	
義務 (二重) 打消	ノ能力 ノ義務	ノ推量	ノ通常	義務 (二重) 打消	ノ能力 ノ義務	ノ推量	ノ通常	法式	命令 ノ法	ノ能力 ノ義務	法ノ量推	法ノ常通	法令 ノ法	ノ能力 ノ義務	法ノ量推	法ノ常通	法式	
現在	未過現 來去在 詳ナラシムベカリキ (メケン)	過現 去在 詳ナラシムベシ	未過現 來去在 詳ナラシムベカリキ 詳ナラシムベシ 詳ナラシムベカリキ 詳ナラシムベシ	現在	未過現 來去在 詳ナルベカリキ (メケン)	過現 去在 詳ナルベシ	未過現 來去在 詳ナリキ	肯定	現在	未過現 來去在 書カレザラシムベカリキ (メケン)	過現 去在 書カレザラシムベシ	未過現 來去在 書カレザラシムベカリキ 書カレザラシムベシ 書カレザラシムベカリキ 書カレザラシムベシ	過現 去在 書カレザラシムベシ	現在	未過現 來去在 書カザラシムベカリキ (メケン)	過現 去在 書カザラシムベシ	未過現 來去在 書カザラシムベカリキ 書カザラシムベシ 書カザラシムベカリキ 書カザラシムベシ	肯定
	未過現 來去在 詳ナラシムベカリキ	過現 去在 詳ナラシムベシ	未過現 來去在 詳ナラシムベカリキ 詳ナラシムベシ		未過現 來去在 詳ナルベカリキ	過現 去在 詳ナルベシ	未過現 來去在 詳ナラザリキ	否定		未過現 來去在 詳ナラシムベカリキ	過現 去在 詳ナラシムベシ	未過現 來去在 詳ナラザラン			未過現 來去在 詳ナラシムベカリキ	過現 去在 詳ナラシムベシ	未過現 來去在 詳ナラザラン	

(二) 形容動詞ノ活用連語(第九章参照)

注意

- (1) この表に挙げたる連語は使役の相としてシムに連るのみにてス、又はサスに連る事なし。
- (2) この表に挙げたる連語は完了時のヌに續かず。
- (3) 指定の助動詞ナリ、タリ(第十一章参照)はこの表の(二)の如き活用連語をなすものと知るべし。
- (4) ベカリより使役になれる活用連語は(一)に準じて知るべし。

明治三十七年十二月五日
 明治三十八年二月十八日
 明治三十八年三月十四日
 印刷發行
 訂正再版印刷
 訂正再版印刷
 三版印刷發行

著者

芳賀矢



發行者

東京市神田區裏神保町九番地
 合資會社 富山房

代表者

合資會社富山房社長
 坂本嘉治馬

著作
 所
 有

印刷者

東京市日本橋區藥研堀町三十三番地
 仁科衛

印刷所

同所
 厚信舍

發兌元

合資會社 富山房

(電話本局) 電報 略號 (ヤマノ)

中等治明
 科教文典
 卷之一 正價金貳拾五錢
 卷之二 正價金貳拾五錢
 卷之三 正價金貳拾五錢

